

病院のポテンシャルを、さらに高めるために 患者本位＆働く人が活躍できるDXを推進中。

近年、電子カルテのクラウド化やAI診断支援の導入など、医療現場におけるDX（デジタルトランスフォーメーション）、業務の効率化や医療の質向上を目的としたスマートホスピタル化が注目されている。そうしたなか、岡山旭東病院は二〇二一年に「IT推進センター」を創設し、これまでにさまざまな取り組みを推進してきた。

活動を率いる土井副院長は、当時を振り返り、「もともと私自身がスマホやパソコンなどITに興味がありました。専門知識に長けた榊原室長に思いを伝えたら、いろいろアイデアがあがってきて、『じゃあ、やってみようか』という流れになったんです。ですからきっかけは『好奇心』です

ね」と柔和に笑う。

実際に現場でDXを推進する榊原室長は、「具体的な取り組みとしては、『病院のアプリがほしい』という副院長の要望を受けて、すでに運用中だったP H R『NOBORI』やスマートフォン問診『ユビー』などの患者サービス機能を集約した病院公式アプリ「旭東S a n」をまずリリースしました」と説明する。

その後も遠隔画像共有アプリ「JOIN」、ベッドサイドタブレット「ユカリタッチ」を導入するなど、積極的にDXを推進。最近では昨年七月から十二月までの半年間、電子カルテ環境の通信経路を使った生成AIの検証プロジェクトを実施した。その際、医師や看護師、診療放射線技

師、理学療法士など、同院を支えるほぼ全職種三〇人からなる「生成AI推進チーム」を設立、看護記録やリハビリ記録を使った情報提供書の作成、録音データを使った患者説明記録、会議記録、外来診察記録の作成などに取り組んだ。検証結果を振り返り、榊原室長は、「ある程度慣れた担当者が行なえば、かなりの確率で時短効果が得られることがわかりました。音声認識で自動作成する外来診察記録については、診察時間は変わりませんが、医師はP Cを操作せず、本来の診察に集中できるため、患者さんとのコミュニケーションがよりスムーズになったという報告もあります」と手応えを感じている様子。

「新しいことにみんなでトライする。もともと当院にはそうした風土があります。病院の機能を高いレベルで維持し、働く人が活躍できるシステムを築くためにもDXは不可欠です。トライ＆エラーはありますが、これからも当院らしいDXを推進していきます」と語る土井副院長と榊原室長。病院のポテンシャルを高めることが患者メリットにつながる。同院のDXはさらなる進化をめざす。

情報システム室 室長
榊原祥裕

副院長
土井英之

お問合せ 岡山旭東病院
☎086・276・3231

NEWS

デイサービスセンター 操風

経験豊かなリハビリスタッフが あなたに合わせたリハビリを行ないます

デイサービスセンター操風には、岡山旭東病院で経験を積んだリハビリスタッフ（理学療法士・作業療法士）が、機能訓練指導員として在籍しています。「ハタラク事業」の一環として、デイサービス利用者の方々が作った「しゃがみにくい方のための、便利な道具（自助具）」を、岡山旭東病院・岡山リハビリテーション病院の売店で販売しています。



▲詳しくはこちら

リーチャー 200円（税込）

L字フックがついているので床にあるものを引っ掛けて取る時などに便利です。



ソックスエイド 200円（税込）

しゃがみこまなくても靴下をはくことができます。サイズは大小あり。



No.137

2025

9-10月号

850円

(本体773円)

おとな、暮らし、ときどきプレミアム

オセラ



この秋訪れたい
ランチ案内

まち・みち案内

広島県 世羅町

大人のためのご馳走。

とっておきを探しに。

Doctor's Eye



食通たちの
心をつかんだ一軒

シエラ、ライター、インフルエンサー…

